

神戸市立博物館の活動目標と指標 27年度(2015年度)

<p>使命(要点)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○多様な神戸文化の特徴と東西文化交流の態様を明らかにし、地域の発展に役立つ「知の拠点」となります。</li> <li>○優れた文化・芸術にふれあう機会を「提供」し、新たな調査・研究を「提案」し、その成果を「発信」する博物館となります。</li> <li>○市民・利用者が集い、神戸を愛し、誇りとする拠りが得られる博物館になります。</li> <li>○震災と復興のなかで得た知見を発信していきます。</li> </ul> <p>活動指針</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○市民が誇れる博物館</li> <li>○すべての人々に親しまれる博物館</li> <li>○地域の文化を支える博物館</li> <li>○情報発信をする博物館</li> </ul>		<p>「神戸市教育振興基本計画」の4段階評価の基準に準じる</p> <table border="1"> <tr> <th colspan="2">段階評価の基準について</th> </tr> <tr> <td>A</td> <td>目標が十分達成されている(9割以上)</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td>目標がほぼ達成されている(7~8割以上)</td> </tr> <tr> <td>C</td> <td>目標の達成がやや不十分である(5~6割以上)</td> </tr> <tr> <td>D</td> <td>目標が達成されていない(5割未満)</td> </tr> <tr> <td>F</td> <td>評価が困難</td> </tr> </table>		段階評価の基準について		A	目標が十分達成されている(9割以上)	B	目標がほぼ達成されている(7~8割以上)	C	目標の達成がやや不十分である(5~6割以上)	D	目標が達成されていない(5割未満)	F	評価が困難
段階評価の基準について															
A	目標が十分達成されている(9割以上)														
B	目標がほぼ達成されている(7~8割以上)														
C	目標の達成がやや不十分である(5~6割以上)														
D	目標が達成されていない(5割未満)														
F	評価が困難														
活動目標	評価			内部評価											
◎活動内容【目標 計画】															
○戦略・方向性															
□指標	27年度 参考数値	評 価													
	参照比較値(過年度実績等)	目標値 a	実績値 b	達成率 b/a	コメント(必要な場合)										
地域の歴史情報や未来の指針が得られる博物館にします 文化財を保存・継承していく博物館にします	27年度は数年をかけて行った地域(須磨)の資料調査に基づき、特別展「須磨の歴史と文化展—受け継がれる記憶—」を開催することができたのは大きな成果といえる。今回の調査により、市の文化財指定へとつながるなど地域の文化財保護にも貢献できた。今後とも地域の調査等を丹念に行い、広く文化財の保存、継承を図っていくこととしたい。また、文化財課との共催で「太山寺展」を開催し、新たに国重要文化財指定となった「四季山水図屏風」を含め、多くの資料を紹介できたことも歴史情報の発信の一つとなった。さらに、資料収集活動と並行して、日常の保存活動を実施できたことを評価したい。				A										
◎調査・研究を積極的に行います	将来的には神戸市域を順に網羅し、調査・研究していけるよう、中長期的な計画を立案することが望まれる。				A										
【目標 計画】 調査研究は収集、保存、展示などの博物館運営の基礎となる欠かせない活動であり、個々人の調査研究とともに、博物館としての組織的な取組についても活性化していく。その成果を諸活動に活かし、発信していく。															
○調査研究テーマの設定と方針の明示、実績の公開	特別展「須磨の歴史と文化展」に関連した須磨区内の調査・研究が積極的に推進できた。今後とも継続的に地域を限った調査・研究を深めていきたい。				A										
□調査研究テーマの設定	調査研究に際して次のとおり調査を実施した。 須磨寺 5回 妙法寺 5回 禪昌寺 4回 現光寺 2回 綱敷天満宮 2回 多井畑厄除八幡宮 4回 白川地区 4回 車地区 3回 その他(個人、美術館、博物館、図書館など) 24回	年度計画のうち、須磨区内の資料調査は予定どおり実施できた。また、須磨に係る館内資料の把握も予定通り進められた。特別展「須磨の歴史と文化展」が予定通り開催され、15,000人を超える入館者を迎えることができた。また、須磨区役所、須磨観光協会とも連携し、地域文化の発信に大きな役割を果たすことができた。			A										
□調査件数	23年度 33箇所 24年度 68箇所 25年度 74箇所 26年度 70箇所 27年度 61箇所	調査件数は26年度より減少したが、27年度の須磨展や28年度以降の展覧会に向けた調査をはじめ、各学芸員個人への依頼による調査も行うことができた。			A										

	<input type="checkbox"/> 研究成果発信数	23年度 69件 24年度 81件 25年度 60件 26年度 65件 27年度 47件	個人レベルを含めた研究成果の発信件数は、昨年に比して減少した。博物館としては、所蔵資料や関係作品の調査をもとに、紀要・目録・博物館だよりの刊行を行った。 また、館で設定した中期的な調査研究テーマ「須磨についての調査」の成果を反映した展覧会、特別展「須磨の歴史と文化展―受け継がれる記憶―」を開催し、展覧会図録の作成、関連講演会、行事を行った点は評価できる。	A
	<input checked="" type="checkbox"/> 地域の歴史に関する情報を発信します	市民、利用者のニーズに合わせた情報発信につながる地域の歴史の研究・調査を深化できた。地域との連携も重要な視点として取り組みに反映できた。		A
【目標 計画】多様な神戸文化の特徴を調査し、その成果を発信することは当館の重要な使命の一つである。地域に関する資料を収集、整理、保存し、また地域の歴史や地域に残る資料の調査などにあたり、その情報、成果を発信する事業などを恒常的に実施するとともに、有馬・兵庫・須磨・旧居留地など、地域と期間を限っての調査活動を重点的に実施し、発信する事業にも取り組む。情報発信にあたっては、市民、利用者のニーズにあわせ、様々な媒体を使って積極的に取り組むとともに、成果を市民と共有していく手立てを講じることで、博物館が地域の発展に欠かせない存在になるよう寄与していく。				
	<input checked="" type="checkbox"/> 有馬・兵庫・須磨・旧居留地など、地域の歴史を調査し、その情報を発信する事業を展開	地道な調査・研究活動を通じて須磨地域の情報発信の集大成として、自主企画特別展「須磨の歴史と文化展」を開催できたことは意義のある成果となった。継続的な事業の拡大や展開が必要である。		A
	<input type="checkbox"/> 自主企画の特別展・企画展の開催	23年度：特別展2回、ギャラリー3回 24年度：特別展1回、ギャラリー3回 (22年度：特別展2回、企画展1回、ギャラリー3回) 25年度：空調改修により自主企画展なし 26年度：特別展1回、企画展2回、ギャラリー2回 27年度：特別展1回、企画展3回、ギャラリー2回	自主企画特別展「須磨の歴史と文化展―受け継がれる記憶―」(2月6日～3月21日)、企画展「太山寺展」(2月6日～3月21日)、「美術セレクション animal編」(7月18日～8月30日)・「南波松太郎旧蔵コレクション 地図皿の華」(6月6日～7月12日)、ギャラリー「絵画コレクション展Ⅰ」(5月16日～7月12日)・「絵画コレクション展Ⅱ―特集川西祐三郎―」(7月14日～9月13日)を開催し、学芸員の研究成果に基づき本館所蔵品や借用資料を展示することができた。	A
	<input type="checkbox"/> その他関連事業の開催	27年度：「須磨の歴史と文化展」関連で7回、博物館をたのしむ3回のうち2回、ミュージアム講座6回のうち4回、こうべ歴史たんけん隊1回、各区勤労市民センター・神戸市立博物館連携事業9回。	特別展「須磨の歴史と文化展」に関連して、地域資料の魅力を発信する多くの関連事業を開催することができた。また、博物館をたのしむ、ミュージアム講座とも地域関連の講座が多かった。さらに、例年実施しているこうべ歴史たんけん隊に加え、25年度から始まった勤労市民センターとの連携事業で各地域に根ざした活動を9回行うことができた。幅広い地域の多様な年齢層に地域の歴史や美術について理解を深めていただくことができ、意義ある取り組みとなった。	A
	<input type="checkbox"/> 地域資料の展示	みてコレ：8点 須磨の歴史と文化展：約170件 太山寺展：30件	常設展示、みてコレで地域関連資料を展示することができた。また、特別展「須磨の歴史と文化展」及び「太山寺展」で古代から近代までの地域資料を展示し、多様な歴史や文化について発信できた点は評価できる。	A

	□新聞雑誌や講演会での情報発信数	23年度:図録2、個人の館外発信22件 24年度:図録3、研究紀要5、個人の館外発信数19件 25年度:図録2、研究紀要2、個人の館外発信数20件 26年度:図録1、研究紀要3、個人の館外発信数49件 27年度:図録1、研究紀要2、個人の館外発信数22件	特別展「須磨の歴史と文化展」において地域の文化を広く発信することができた。過去最多となった昨年度に比して、発信数は減少した。	A
	□地域史に関する対応件数	23年度:地域史関係143件、その他15件 24年度:地域史関係138件、その他17件 25年度:地域史関係133件、その他14件 26年度:地域史関係79件、その他14件 27年度:地域史関係94件、その他16件	例年どおり特別利用の件数も充実していた。また、各学芸員が、地域史や地域の資料についてのさまざまな問い合わせに積極的に対応した。特別展「須磨の歴史と文化展」開催に伴い、特に須磨の地域史に関する多くの問い合わせに対応した。	A
	○関連資料データベース(DB)の構築	地域関連資料の情報公開は、これまで遅れが目立っていたが、写真や絵画作品など景観資料(約4,000点)を中心にDB化が進められている。リニューアル後に公開できるよう作業を進めていく。		A
	□DBの利用数	Google Art Projectへの参加により、既存の名品撰を合わせると、当館の高精細画像の公開件数は128件を超えており、日本有数の公開数と品質を誇るデジタルアーカイブに成長した。		A
	◎「東西文化交流」と神戸の歴史に関わる文化財を永続的に収集します	28年度の自主企画展覧会を見据えた鶴亭作品や、神戸の景観資料として利用できる明治初期の写真など、貴重な資料を収集することができた。		A
【目標 計画】神戸の地域関連、あるいは東西文化交流に関わる資料について、その散逸を防ぎ、可能な限り収集するのは、博物館の重要な機能のひとつである。価値の高い資料を分野に偏ることなく収集することが求められる。				
	○特色ある館蔵品等の充実、収集方針の明示と実績の公開	当館のテーマである「東西文化の接触と変容」に沿った資料の収集が27年度も行うことができた。		A
	□資料収集(購入)	23年度:10件 3,118,448千円 24年度:16件 12,437,750千円 25年度:7件 834,300千円 26年度:10件 1,226,434千円 27年度:9件 2,193,504千円	歴史資料:6件1,683,504千円、美術資料:2件510千円、合計8件2,193,504千円を購入した。歴史、美術資料ともに、当館の収蔵品として相応しいものを購入することができた点は十分に評価できる。資料購入に即応するためにも、年度毎の予算とともに、継続的な基金の確保が必要である。	A
	□資料収集(寄贈)	23年度:10件 評 805,342千円 24年度:6件 752点 評 1,376.9千円 25年度:4件 4点 評 30千円 26年度:85件463点 評 17,997千円 27年度:278件948点 評 146,851千円	歴史、美術、地図資料と各分野にわたって貴重な資料の寄贈を受けた。今後の積極的な活用が求められる。	A

	<input type="checkbox"/> 資料収集(寄託)	24年度: 1件3点(歴史資料) 25年度: 0件0点 26年度: 0件0点 27年度: 471件476点 (解除:5件7点)	27年度は歴史資料471件476点を受託した。近世、近代の神戸の歴史を知る上で貴重な資料であり、今後の活用が求められる。今後とも、展示に活用できる資料や、保存上、預かる必要性が高い資料などは積極的な受け入れを考えていく必要がある。	A
	◎社会的資産としての文化財(館藏品)を保全し、後世に伝えます	規定通りのモニタリングと清掃作業を行うことにより、適切な収蔵環境を維持することができた。また、限られた予算の中ではあるが、博物館の収蔵・展示の面で重要な資料の修復を行うことができた。		A
【目標 計画】収蔵資料の永年保存は他の公共施設と一線を画する博物館の中核機能である。しかし、博物館に収蔵されている資料も、ひとたび注意を怠れば、重大な破損・滅失の危機に直面する。化学的殺虫殺菌処理にたよらない、日常的な監視態勢と迅速適切な処理(IPM)が、博物館・美術館業界の資料永年保存の標準となっている昨今において、その完全な遂行は博物館の重大な使命として位置づけられる。				
	<input type="checkbox"/> 方針の明示 <input type="checkbox"/> 良好な収蔵環境の整備	IPMの理念に則った、収蔵環境モニタリングに必要な作業は規定通り行うことができた。モニタリング・生物環境調査において問題は確認されなかった。また、収蔵庫において壁際の温湿度を改善するためにサーキュレータを導入するなど、より適切な収蔵環境を維持することに努めた。		A
	<input type="checkbox"/> 収蔵(保存)環境の調査・整備(IPM)	温湿度測定 毎週×3ヶ所 虫類のモニタリング 毎月×49ヶ所 生物環境調査 7月・9月実施 収蔵庫定期清掃 全面1回ほか部分清掃 殺虫作業 1回 燻蒸作業 1回	モニタリング、生物環境調査、殺虫、燻蒸作業を予定どおり行い、適切な収蔵庫環境を維持することができた。定期清掃については、資料の状態把握という観点からもより一層頻繁に行っていく必要がある。また、壁際の空気循環を改善するためにサーキュレーターを導入し、より適切な収蔵環境の維持に努めた。	A
	<input type="checkbox"/> 資料の保全	当館を代表する所蔵品のひとつである織田信長像の修復が終了したのは大きな成果である。また、28年度自主企画展を見据えた作品補修を行えたことも評価できる。今後とも順次計画立てて資料の保全を図っていきたい。		A
	<input type="checkbox"/> 資料の補修	23年度: 79点 24年度: 7点 25年度: 4点 26年度: 3点 27年度: 25点	自主企画特別展に展示予定の資料2点を含む25点を修理できた点が評価できる。特に、26年度から実施していた、国指定重要文化財「織田信長像」の修理が無事完成したことは大きな成果と言える。(平成27年6月納品)	A
	<input type="checkbox"/> 大震災による被災の教訓と復旧・復興の記録の公開	阪神・淡路大震災の被害状況はHPでも公開しているが、アクセス数など現状ではモニタリングは不可能となっている。今後も個別の問い合わせの対応を受け付けるとともに、普段の業務の中でも震災時の教訓が生かせるような必要である。		F

	□大震災の記録の利用	22年度:9,747件 23年度:10,932件 24年度:11,447件 25年度~27年度:不明	HP上で震災関係の情報は引き続き公開している。また、個別の問い合わせについては、その都度受け付けている。 東京文化財研究所より、文化財防災資料センターが保管する資料について、返却要請があり、27年度、資料引渡しの正式手続準備のため、すべての資料を東京文化財研究所へ貸出中。書類が整えば、そのまま資料は東文研の保管となる。ただし、全国美術館会議その他のレスキュー関係の生資料は当館保管のまま。			F
	◎館蔵品に関する情報開示の整備を行います	館蔵品データベースの公開をめざして、できるだけ多くの館蔵品のデータを継続的に整備し、より一層の情報開示を推進していく。				B
【目標 計画】博物館の所蔵品は神戸市民、そして本市の歴史文化と東西文化交流に関心を寄せる全ての人々の共有財産であるとする観点から、その情報を可能な限り公開することが望まれる。特にインターネットを媒体にしたデータベース公開の実現を目指すべきである。						
	○館蔵品情報目録の継続的な発信発行	館蔵品目録は予定通り継続的に刊行できた。特別利用の件数は減となっているものの、外部委託先での需要は多く、館蔵品の情報開示につながっている。				A
	□館蔵品目録の継続発行	研究紀要、美術の部・歴史の部各1冊を刊行	研究紀要、美術の部・歴史の部各1冊を刊行	100%	目標どおり発行することができた。	A
	□館蔵品の特別利用数	23年度特別利用:811件 24年度特別利用:748件 25年度特別利用:754件 26年度特別利用:417件 27年度特別利用:146件	146件393点 外部委託実績 318件847点		26年10月より画像利用のうち商業利用目的の画像提供が外部委託となったため、利用件数は減少した。但し、外部委託している商業利用の実績は318件を数え、館蔵資料の発信という目的は十分に果たしている。	A
	□ホームページへの掲載	27年度:名品撰約240件、Google 128件。 文化遺産オンライン101件。	28年度以降、文化遺産オンラインを活用した大量の所蔵品情報の公開に向けて準備を進めている。			B
	○博物館資料DBの構築	現在職員が利用可能なDBの資料登録件数は3万6千件。歴史資料を中心に整理が行われており、リニューアルに向けて、より充実した内容の構築が図れると同時に、新たな情報公開のための準備作業も展開されている。				C
	□データベースのアクセス件数		データベースの公開については、その基幹となる画像アーカイブの構築が急務だが、地域史関係で、神戸の景観資料の整理約4000件の整理が本年度より始まっている。現在は、名品撰・Google Art Projectなどで作品情報、画像公開も展開されており、リニューアルを見据えた「文化遺産オンライン」での情報公開(現在のところ約1600件の所蔵品情報)について準備中である。新たなDB・情報公開システムについても、博物館リニューアルと並行して検討中である。			C

<p>すぐれた芸術・文化に出会える博物館にします</p>	<p>リニューアル検討委員会の設置ならびに「神戸市立リニューアル基本計画」が策定され、常設展示の今後の方向性を明文化することができたことは一定の成果であると言える。また、「地域の歴史に関する情報を発信します」とも重複するが、「須磨の歴史と文化展」と「太山寺展」などの企画によって、館藏品などの魅力を伝えることができています。さらに、目標入館者数には到達していないものの、27年度も質の高い大型海外展を開催でき、芸術・文化に出会える博物館としての目標はクリアできている。「大英博物館展」最終日に、昭和57年11月の開館以来の入館者数1,000万人を達成した。</p>				<p>A</p>	
<p>◎楽しく学べる魅力的な常設展示を行います</p>	<p>28年度以降、リニューアル基本計画の策定を基に具体的なリニューアル事業を展開していく。リニューアル工事の開始までは従前どおり、工夫を重ねた常設展示の魅力アップが必要である。</p>				<p>A</p>	
<p>【目標 計画】 常設展示(ギャラリーを含む)は館の特色を最も発揮し、展示活動の基本となるところである。日常的な取り組みの活性化を図るとともに、学習室を除いて大幅なリニューアルが行われていない現状を踏まえ、将来に向けた準備も行っていく必要がある</p>						
<p>○常設展示の内容の更新・拡充・整備</p>	<p>現行の常設展示では、新収資料も含めて展示替を行い、入館者に分かりやすい常設展示に努めた。また、常設展示・コレクション展示・歴史展示に関して、リニューアル基本計画を策定した。リニューアルに向けた「基本設計・詳細設計」の推進と並行しながら、リニューアル事業を機に館藏品の整備をあわせて実施する必要がある。</p>				<p>A</p>	
<p>□展示替え</p>	<p>23年度:24回 24年度:23回 25年度:22回 26年度:19回 27年度:22回</p>	<p>目標値20回</p>	<p>常設展示のテーマの中で、館蔵資料の特性を生かした展示替を計画どおり行うことができた。</p>		<p>A</p>	
<p>□常設展示内容</p>	<p>現状のテーマの中で館蔵資料を生かし、保存状態を考慮しながら、入館者にとって分かりやすい常設展示を行うことができた。</p>				<p>A</p>	
<p>□展示解説開催数</p>	<p>23年度:61日、271人、平均4.4人 24年度:69日、321人、平均4.7人 参加者のいない日数15日 25年度:13日、49人、平均3.2人 参加者のいない日数3日 26年度:32日、144人、平均4.5人 参加者のいない日数9日 27年度:47日、192人、平均4.0人 参加者のいない日数5日</p>	<p>参加者1日平均5人程度</p>	<p>平成27年度:実施日数47日 参加者数192人、平均4.0人、参加者のいない日数5日。</p>	<p>80%</p>	<p>展示解説は常設展期間のみに開催している。27年度の常設展期間の入館者数は5,465人で1日の平均入館者数は116人。今年度は、平均人数が、わずかに目標値に届かなかった。常設展の開催日数も少なく、その期間の入館者数が少ないことも原因だが、展示解説を行っていることを紙媒体やフェイスブックなどの速報性のある媒体等で発信するなど、改善に努める必要がある。</p>	<p>B</p>
<p>□展示設備・施設の改修</p>	<p>リニューアル検討委員会開催回数:6回</p> <p>リニューアル検討委員会を6回開催し、「リニューアル基本計画」を策定することができた。また、来年度以降のリニューアル経費が予算化され、改修計画が実現していくことは高く評価される。</p>				<p>B</p>	
<p>◎特色ある館藏品を生かした展示を行います</p>	<p>館藏品をはじめとして、展示の基礎となる資料調査に基づいて、企画展を開催でき、館藏品の特色を生かすことができた。</p>				<p>A</p>	

<p>【目標 計画】 特色あるコレクション、調査研究の成果を生かした展示は博物館の基本となる活動であり、館の力量が問われるところである。常設展示(ギャラリーを含む)以外に、南蛮紅毛美術、古地図などの企画展、調査研究にもとづいた自主企画の特別展をそれぞれ少なくとも年間1回は開催し、魅力を発信する</p>								
	<input type="checkbox"/> 調査研究に基づく自主企画の特別展・企画展の開催 <input type="checkbox"/> 南蛮・古地図の企画展の開催	特別展「須磨の歴史と文化展」の開催が特筆できる。結果的に多くの方々に入館いただき、地域の魅力を存分にアピールできた。また、南蛮美術企画展、古地図企画展では、展示する頻度の少ない資料、新たな収集資料を展示し、館蔵品の魅力を発信することができた。		A				
	<input type="checkbox"/> 展覧会開催	特別展「須磨の歴史と文化—受け継がれる記憶—」展 企画展「太山寺展」 南蛮企画展「美術セレクション-animal編」展 古地図企画展「南波松太郎旧蔵コレクション 地図皿の華」展	特別展「須磨の歴史と文化展」では、「須磨」という歴史的にも文学的にも広がりがあがるテーマを取り上げ、数年の調査成果を生かし、原始から近代に及ぶ地域の魅力を発信できる展覧会を行うことができた。企画展「太山寺展」では、神戸屈指の古刹・太山寺の歴史を館蔵資料も活用しながら広く発信することができた。また、南蛮美術企画展では、動物をテーマに展示する機会が少ない館蔵品の魅力を発信し、古地図企画展では新たに寄贈を受けた地図皿の名品を展示することができた。	A				
	<input type="checkbox"/> 入館者数	特別展「須磨の歴史と文化—受け継がれる記憶—」展 企画展「太山寺展」 目標入館者数:9,000人 ※なお、南蛮企画展と古地図企画展は、「ボヘミアン・グラス展」とあわせて開催した。	<table border="1"> <tr> <td>特別展「須磨の歴史と文化—受け継がれる記憶—」展 9,000人</td> <td>15,593人</td> <td>173%</td> <td>目標入館者数を大きく上回る入館者数を達成した。</td> </tr> </table>	特別展「須磨の歴史と文化—受け継がれる記憶—」展 9,000人	15,593人	173%	目標入館者数を大きく上回る入館者数を達成した。	A
特別展「須磨の歴史と文化—受け継がれる記憶—」展 9,000人	15,593人	173%	目標入館者数を大きく上回る入館者数を達成した。					
	<input type="checkbox"/> 満足度	23年度:「和ガラスの神髄」 82.51 23年度:「日本絵画のひみつ」 79.31 24年度:「南蛮美術の光と影」 86.06 24年度:「国宝桜ヶ丘銅鐸の謎に迫る」 85.70 26年度:「ギヤマン展」 84.77 27年度:「須磨の歴史と文化展」 85.3	特別展「須磨の歴史と文化展」の満足度は目標値を達成することができた。各項目の集計、コメント欄の確認を迅速に行い、会期中に展示の改善に生かすことができた。	A				

◎海外展などの特別展を開催します	「チューリヒ美術館展」「ボヘミアン・グラス展」「大英博物館」の3つの海外展を開催し、バラエティーに富み、質の高い世界的な作品や歴史資料を紹介することができた。3展で45万人を超える入館者があり、いずれの展覧会においても来館者の高い満足度が得られた。	A																								
【目標 計画】 博物館は人々がすぐれた文化財と対話できる場でなければならない。国内外の博物館施設、または新聞社等のマスメディアと共同し、質の高い大型展を年に1～2回の頻度で開催する。そのための財源確保、広報計画など広範囲な業務を事前の計画の下、実施する。																										
○国内外のすぐれた資料、作品を展覧会で紹介	「チューリヒ美術館展」「ボヘミアン・グラス展」「大英博物館」の3つの海外展を開催し、バラエティーに富み、質の高い世界的な作品や歴史資料を紹介することができた。チューリヒ美術館展は予算の目標入館者数をほぼ達成できたものの、ボヘミアン・グラス展・大英博物館展は目標に届かなかったが、3展で457,794人の入館者を得られ、いずれも入館者の満足度は高かった。28年度以降は、展覧会の魅力をより浸透できる広報や関連事業の展開が課題である。	A																								
□特別展開催	「チューリヒ美術館展 印象派からシュルレアリスムまで」 1.31～5.10 「プラハ国立美術工芸博物館所蔵 輝きの静と動 ボヘミアン・グラス展」 6.6～8.30 「大英博物館展 100のモノが語る世界の歴史」 9.20～1.11	チューリヒ美術館展では、印象派以降の西洋画を代表する質の高い展覧会となった。また、ボヘミアン・グラス展では、中世から現代に及びボヘミアン・グラスの変遷を体系的に紹介することができた。大英博物館展では、全世界から収集された原始から現代に及び100の展示品から世界の歴史を観るというコンセプトの展示が好評を得た。	A																							
□入館者数	「チューリヒ美術館展 印象派からシュルレアリスムまで」（前年度からの入館者も含む） 「プラハ国立美術工芸博物館所蔵 輝きの静と動 ボヘミアン・グラス展」 「大英博物館展 100のモノが語る世界の歴史」 27年度特別展入館者合計（チューリヒ展の前年度入館者数も含む） 27年度入館者総数（特別展、常設展含む）	<table border="1"> <tr> <td>220,000人</td> <td>218,044人</td> <td>99%</td> </tr> <tr> <td>55,000人</td> <td>37,519人</td> <td>68%</td> </tr> <tr> <td>250,000人</td> <td>202,231人</td> <td>80%</td> </tr> <tr> <td>525,000人</td> <td>457,794人</td> <td>87.2%</td> </tr> <tr> <td></td> <td>360,839人</td> <td></td> </tr> </table>	220,000人	218,044人	99%	55,000人	37,519人	68%	250,000人	202,231人	80%	525,000人	457,794人	87.2%		360,839人		チューリヒ美術館展は、目標をほぼ達成できた。ボヘミアングラス展、大英博物館展は目標に届かなかった。	B							
220,000人	218,044人	99%																								
55,000人	37,519人	68%																								
250,000人	202,231人	80%																								
525,000人	457,794人	87.2%																								
	360,839人																									
□満足度	<table border="1"> <tr> <td>23年度：「山本二三展」</td> <td>84.17</td> </tr> <tr> <td>「平清盛」</td> <td>77.44</td> </tr> <tr> <td>24年度：「マウリッツハイス美術館展」</td> <td>81.60</td> </tr> <tr> <td>「中国王朝の至宝」</td> <td>82.11</td> </tr> <tr> <td>25年度：「ブーシキン美術館展」</td> <td>83.54</td> </tr> <tr> <td>「ターナー展」</td> <td>82.43</td> </tr> <tr> <td>26年度：「ポストン美術館展 北斎」</td> <td>83.53</td> </tr> <tr> <td>「メトロポリタン美術館展」</td> <td>82.04</td> </tr> <tr> <td>27年度：「チューリヒ美術館展」</td> <td>82.24</td> </tr> <tr> <td>「ボヘミアングラス展」</td> <td>80.8</td> </tr> <tr> <td>「大英博物館展」</td> <td>82.2</td> </tr> </table>	23年度：「山本二三展」	84.17	「平清盛」	77.44	24年度：「マウリッツハイス美術館展」	81.60	「中国王朝の至宝」	82.11	25年度：「ブーシキン美術館展」	83.54	「ターナー展」	82.43	26年度：「ポストン美術館展 北斎」	83.53	「メトロポリタン美術館展」	82.04	27年度：「チューリヒ美術館展」	82.24	「ボヘミアングラス展」	80.8	「大英博物館展」	82.2	85%	チューリヒ美術館展、ボヘミアングラス展、大英博物館展ともに満足度80%以上を記録し、入館者に好評を得た。	A
23年度：「山本二三展」	84.17																									
「平清盛」	77.44																									
24年度：「マウリッツハイス美術館展」	81.60																									
「中国王朝の至宝」	82.11																									
25年度：「ブーシキン美術館展」	83.54																									
「ターナー展」	82.43																									
26年度：「ポストン美術館展 北斎」	83.53																									
「メトロポリタン美術館展」	82.04																									
27年度：「チューリヒ美術館展」	82.24																									
「ボヘミアングラス展」	80.8																									
「大英博物館展」	82.2																									

芸術・文化を介して、利用者が広く交流できる博物館にします	学校教育、生涯学習の面で利用者が広く交流できる場として存立しており、学習支援交流員など人材育成の面などでも整備ができています。今後とも、広報などで周知を図り、博物館の存在意義をより高めていく必要がある。	A	
◎学校との連携を図ります	学校との連携は十分図れている。今後も博物館活動の重要な柱の一つとして充実させたい。	A	
【目標 計画】 博物館が所蔵している特色ある資料をもとにした教材の開発や展覧会独自のワークショップ等を行い、来館者への機会の提供かつ出張授業等に積極的に取り組むことが博学連携の在り方としては不可欠となっている。将来に向けても学校と連携を図り利用の場としてあるように、プログラムの蓄積と整備を計画・実施していく必要がある			
○学校との連携	学校との連携は、学校団体の受入、出張事業など、要望に応じた形で十分図れている。今後は新規プログラムの開発などのソフト面の整備に取り組む予定である。	A	
□小・中・高等学校の受入数	<p>23年度 幼:0 小:47 中:165 高:49 その他:54  24年度 幼:0 小:4 中:80 高:26 その他:62  25年度 幼:0 小:25 中:50 高:19 その他:15  26年度 幼:0 小:43 中:97 高:34 その他:36  27年度 幼:0 小:37 中:73 高:40 その他:46  (その他は大学・専修学校など、単位は校)  トライやる  22年度:13校30人、23年度:15校29人、24年度:13校28人、  25年度:11校19人、26年度:13校24人、27年度:8校13人、  【合計】  23年度:330校10,681人、  24年度:185校7,942人、25年度:120校4,972人、26年度:223校9,475人、27年度:204校9,488人</p>	<p>学校園の要望に沿ったかたちで、入館への対応、オリエンテーション(入館学校園のうち19.9%)、またトライやるウィークの受入など、適切な受入が図られている。</p>	A
□連携数(出張授業等のアウトリーチ数、教材の貸出数)	<p>※単位は校  23年度 保・幼:0 小:23 中:18 高:6 大:4 計 52  24年度 保・幼:0 小:95 中:14 高:1 特別支援:1 計111  25年度 保・幼:1 小:103 中:12 高:0 特別支援:2 計118  26年度 保・幼:0 小:121 中:7 高:3 特別支援:1 計132  27年度 保・幼:1 小:106 中:0 高:4 特別支援:2 計113</p>	<p>可能な限りでの広報活動や学芸員と指導主事の体制づくりを進めることができた。</p>	A
□教員研修の受け入れ	<p>23年度 5回157人 24年度 8回392人 25年度 3回114人  26年度 6回145人 27年度 2回60人</p>	<p>入館での研修は2校となった。学外での博学連携に向けた研修会などの広報は校長会などの場を活用して、定期的に行っている。また、文化庁補助事業「先生のためのミュージアム活用術」の研修の一つとして当館の教育普及プログラム「浮世絵入門」を小・中・高・特支の教職員17名に体験していただいた。</p>	A

	<input type="checkbox"/> 大学との連携事業数	博物館実習受入数 23年度:18校29名 24年度:17校26名 25年度:16校21名 26年度:17校26名 27年度:17校26名 神戸市外国語大学との連携事業 大英博物館展時の記念講演会 11月28日(土) 14時～15時30分 (博物館講堂にて) 「探り・集め・展示する～イギリスの海外展開と博物館～」 講師:指 昭博(神戸市外国語大学教授・外国学研究所長)	博物館実習では、館の概要、展覧会開催までの流れ、資料保存、資料の取り扱い、収蔵庫清掃、倉庫の整理など、現場でしか体験できない、実習生にとって実践的かつ有意義なプログラムを提供することができた。 また、24年度から始まった神戸市外国語大学との連携事業も引き続き実施され、146名の参加者を得た。	A
	<input type="checkbox"/> 教育普及プログラムの確立	文化庁補助事業により、視覚障害者用教材や子ども向け鑑賞手帳を製作することができた。今後、これを活用して有効性を確認する作業を実施する予定である。		A
	<input type="checkbox"/> 教育普及プログラム数・内容更新	●教育普及プログラム 1. 国宝 桜ヶ丘銅鐸 0校 2. 古代生活の体験しよう 17校 3. 土器と埴輪をつくろう 0校 4. 源平合戦図屏風からみえる平家物語 15校 5. はるかなる西洋 17校 6. 伊能忠敬の日本地図 15校 7. 神戸からみえる文明開化 17校 8. 水墨画入門 4校 9. 浮世絵入門 20校 10. 港の発展 2校 11. 六甲山とグループ 0校 ●おきしお号 21校 ●新規開発教材 1. 触図点字プレート 2. みゆーかつ帳	学校での学習内容をより深く理解するために用意した当館の教育普及プログラムを市内各所の学校で実施し、効果を得た。また、おきしお号の出動回数も21校に及び、博物館が展開する新たな教育普及用のツールとして認知されてきた。 教材の開発については、文化庁の平成27年度文化芸術振興費補助金(地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業)において新規教材2件を製作した。28年度以降活用を図っていきたい。	A
	<input type="checkbox"/> 子ども向け事業の展開	1. こどもの日スペシャル 5/5 27人 2. 博物館たんけん隊 8/1 27人 3. 夏休み土器づくり教室 7/25・26、8/8 69人 4. ジュニアミュージアム講座 計 6回 104人 4/25 「東西合体！チューリヒ美術館展の名作で屏風作り」 9人 6/27 「かんたん！ガラス工芸 グラスリッツェンに挑戦」 20人 7/11 「オリジナル風鈴づくり」 20人 10/10 「自分だけのオリジナルコインをつくろう」 20人 11/28 「石を彫って自分の印章を作ろう」 17人 12/19 「美しく光るライトスクラッチに挑戦」 18人 5. 子ども向けワークショップ 5/23、1/23 「浮世絵摺り師に挑戦！」 2/20 「オリジナルまんだらをつくろう！」 6. こうべ歴史たんけん隊 3/19 2人 7. 学習支援交流員によるワークショップ 8/1, 8/2, 8/23, 8/29, 8/30 106人	多くのプログラムを提供し、博物館資料や博物館が開催する展覧会、神戸の歴史や美術にふれて、体験しながら学んでいただくことができた。学習支援交流員によるワークショップもさらに充実してきた。28年度以降も楽しみながら学ぶことができるプログラムを提供していきたい。	A

◎地域との連携を図ります	各種団体や機関、地域、大学との幅広い連携が実現されつつある。また特別展「須磨の歴史と文化展」と連動し、須磨区を対象に新たな連携の形を模索した。今後はソフト面での充実が課題である。	A
【目標 計画】 博物館はその立地する地域と不可分の存在である。博物館は地元の文化財のみならず、生活する人々とその活動すべてに関わりをもたねばならない。博物館はその事業を計画・実施する際に地域の学校や社会教育施設、文化団体、商業施設やマスコミなどと連携を重視しなければならない		
○居留地協議会、周辺商店街等との連携	従前通り各種団体や地域とも連携が図れているが、今回は新たに須磨区を対象にして連携を図ることができた。今後も他地域との連携を模索することが必要である。	A
□連携数など	旧居留地協議会 三宮センター街1丁目・2丁目の各商店街振興組合 須磨区役所、須磨観光協会	旧居留地協議会にはメンバーとして会議に参加し、協力関係にある。三宮センター街1丁目、2丁目の各商店街振興組合の協力を得て、特別展のバナー、ポスター掲示を実施。また、27年度は須磨区役所、須磨観光協会と連携して、「須磨歴史紀行スタンブラー」、「須磨歴史講演会」を行い、「須磨の歴史と文化展」と連動して地域との連携を図ることができた点が評価できる。
□共催事業など	8/23 みなと銀行との共催事業「南蛮屏風緒をつくろう」 24人	26年度に続いて行った、みなと銀行との共催によるワークショップは本年度も好評を得た。
○生涯学習の支援	連携数は着実に増加している。今後はどのような内容の講座を実施するかというソフト面を充実させる必要がある。	
□連携数(出前講座・講師派遣など連携事業数)	<p>勤労市民センター・神戸市立博物館連携事業</p> <p>6/20 「耀きの静と動 ポヘミアングラスを楽しむために」 63人</p> <p>7/18 「古地図資料－南波コレクションと秋岡コレクションの世界－①」 43人</p> <p>8/29 「古地図資料－南波コレクションと秋岡コレクションの世界－②」 45人</p> <p>10/31 「大英博物館展－100のモノが語る世界の歴史」を楽しむために 79人</p> <p>11/5 「日本絵画のひみつ－秋田蘭画と石川大浪の画業から－」 26人</p> <p>1/23 「幕末を駆け抜けた紀州藩士」 17人</p> <p>2/6 「受け継がれる記憶－須磨・長田の名宝探訪」 28人</p> <p>2/11 ワークショップ「チョコレートでつくる卑弥呼の三角縁神獣鏡」 9人</p> <p>2/13 「旗本退屈男の事件簿」 15人</p> <p>連携数</p> <p>23年度 23件</p> <p>24年度 31件</p> <p>25年度 30件</p> <p>26年度 33件</p> <p>27年度 勤労市民センターへの派遣9件 その他の事業への講師派遣など31件</p>	25年度から始まった勤労市民センターとの連携事業は、市民に対する博物館の展覧会の広報として、また、神戸の歴史、所蔵品の理解を深めるよい機会となっている。

◎他の博物館・美術館との連携を図ります	従来どおり、他館が開催する展覧会に考古・歴史、古地図、美術各分野の作品・資料を貸出し、協力した。また各学芸員が他館や他機関、他都市からの依頼に応じ、資料購入の評価委員、資料調査委員、講演会講師などの任を務めた。あわせて本年度、長崎歴史文化博物館と所蔵資料や研究成果を共有し準備を進めてきた特別展「我が名は鶴亭」を長崎歴史文化博物館で開催できた点は、他館との連携事業の展開に関する重要な成果である。	A
【目標 計画】 博物館は単独では存続し得ず、常に同じ博物館相当施設と連絡と協力をしなければならない。それは日本国内のみならず広く世界的な範囲で交流すべきで、そのためには館を支える学芸員の切磋琢磨とそれを支える体制作りが必要である。		
○他の博物館・美術館等との情報交換、連携事業の展開	従来どおり、考古・歴史、古地図、美術各分野の作品・資料を他館の展覧会に貸出した。また各学芸員が他館や他機関、他都市の依頼に応じ、専門分野に関する資料購入の評価委員、資料調査委員、講演会講師などの任を務めた。また長崎歴史文化博物館と所蔵資料や研究成果を共有し準備を進めてきた特別展「我が名は鶴亭」を長崎歴史文化博物館において開催した。	A
□他館での館蔵資料の発信	23年度：申請数31件（貸出先32件）135点 24年度：申請数30件（貸出先33件）153点 25年度：申請数27件（貸出先27件）556点 26年度：申請数31件（貸出先31件）582点 27年度：申請数25件（貸出先27件）177点	考古・歴史・古地図・美術の各分野から、また、古代から近代まで各時代の資料をバランスよく貸し出す結果となっている。今年度は、国宝桜ヶ丘銅鐸を九州国立博物館、八代市立博物館に貸出し、国宝の価値を広く発信できた点も評価できる。
□他館での委員、講師など	他館での評価委員、講師、他都市審議会委員など 23年度：25件 24年度：50件 25年度：33件 26年度：33件 27年度：31件	各学芸員の専門分野を生かして、資料購入時の評価委員、資料調査委員、講演会講師などの任にあたった。
□他館との共催事業	長崎歴史文化博物館「わが名は鶴亭」展（平成28年2月6日～3月21日）	相互の資料を活用し、研究成果を共有しながら準備を進めてきた、特別展「わが名は鶴亭」展が長崎歴史文化博物館で開催された。展示にかかる費用の一部を共有し、作品解説、図録の制作も2館の学芸員が協力して行った。収蔵資料、研究テーマを共有する館が相互に連携した展覧会を開催できた点が評価できる。また、文化庁の補助事業である「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」を活用して神戸市立小磯記念美術館、神戸ゆかりの美術館、竹中大工道具館、神戸ファッション美術館とともに実行委員会を結成し、ミュージアム活用術などの事業を実施し、参加者から高い評価を得ている。
◎各種講座を一層充実します	長年開催している講座であり、毎回多数の申し込み者があり、多くの市民に認知されていると考えている。今後は新規企画の考案や館外講座の開催など、新たな展開を図っていきたい。	A
【目標 計画】 生涯学習の場として、博物館は社会教育施設のなかでも欠かせない存在である。来館者に対して講座等を積極的に行うことで、展覧会理解、館蔵資料、各自の研究成果を発信し、博物館の魅力を伝えていく。		
○講座内容の開発、充実	各種講座を開催することにより、館収蔵資料の魅力を伝え、生涯学習の場としての機能を十分果たしていると考えている。今後ともより一層の充実が求められる。	A

	□事業数	1. ミュージアム講座 6回 2. 博物館を楽しむ 3回 3. 特別展開連講演会 9回 4. 特別展イブニングレクチャー、アフタヌーンレクチャー 42回 5. 特別展開連講座 5回	ミュージアム講座、博物館を楽しむなどの定例の講座に加えて、特別展開連の講演会、イブニングレクチャー(アフタヌーンレクチャー)、現地見学会などの特別展開連講座など、充実した事業を展開することができた。	A	
	□参加者数	1. ミュージアム講座 のべ770人 2. 博物館を楽しむ のべ20人 3. 特別展開連講演会 のべ1,034人 4. 特別展イブニングレクチャー、アフタヌーンレクチャー のべ3,652人 5. 特別展開連講座 のべ698人	ミュージアム講座: 160人 博物館を楽しむ: 20名 各講座ともほぼ目標どおりの参加者を得ることができた。	定例の講座に加え、展覧会関連の講演、講座も多くの参加者を得ることができた。今後の課題として、事前募集型の講座は、申込者が固定化しないよう広報手段などを検討し、新規かつ若年・中年層が参加できるような仕掛けを考える必要がある。	A
	○利用者ニーズの把握	定例の講座についてはアンケート調査が行い、大半の参加者に満足いただいたという回答が得られている。		A	
	□利用者満足度	「ミュージアム講座」計107名: 男性37名、女性66名 未記入4名、興味がでた52名、まあでた37名、普通10名、やや興味がもてなかった1名、もてなかった1名、未記入6名  「博物館をたのしむ」計7名: 男性5名、女性2名 未記入0名。講座全体で、興味がでた6名、まあでた1名、普通0名、やや興味がもてなかった0名、もてなかった0名、未記入0名	「ミュージアム講座」、「博物館をたのしむ」ともに高い満足度を得た。また、特別展の関連講演会、イブニングレクチャー(アフタヌーンレクチャー)も展覧会アンケートの自由記述欄に「展覧会に対する理解が深まった」というコメントが寄せられている。	A	
	◎広報活動を充実し、各種事業を広く紹介します	博物館の活動をより多くの方々に周知し、利用してもらうため、様々な広報手段、媒体を用い、幅広い広報の実施に努めた。HPの更新は他の記者発表との連動性を高め、迅速な更新を行った。SNSでの情報発信については26年10月からの実施であるため、年度比較はできないが、積極的にコンテンツの追加を図り、多くのアクセスが得られている。		A	
【目標 計画】 博物館の基本活動は文化財の収集と保存、活用である。それらの活動は今に生きる人々に理解されることによって、いっそうの発展を遂げることができる。そのためには、展覧会広報のみならず、博物館活動すべてをあらゆる媒体を通じて知らしめる必要がある。					
	○広報活動の充実	市政記者への資料提供、情報誌等の広報媒体への情報提供は適宜、正確・迅速に行った。主要駅から博物館にいたる導線に沿った街頭広報媒体への掲出も従来どおり実施した。また実行委員会形式の展覧会に関しては、共催各社と協力し、積極的な広報に努めた。		A	
	□広報掲載件数	事業情報や周知すべき事柄については、適宜、記者資料提供を行った。情報誌等の広報媒体への情報提供は正確・迅速に行うよう努めた。JR三ノ宮駅前交番北看板や三宮センター街のタペストリーや京町筋バナーなど、主要駅から博物館に至る導線に沿った広報掲出を行った。また三宮センター街の映像システムやミントビジョンなど映像での広報も活用した。実行委員会形式で開催する展覧会については、PR会社を用い、各種広報媒体への効果的な情報提供を図った。また、主要駅での駅張りや車内吊りなどの交通広告を活用した。あわせて共催各社が放映する番組・新聞等に学芸員が積極的に出演、記事寄稿し、展覧会の周知に努めた。 ・記者資料提供 9件 ・神戸市関係広報 74件 ・その他媒体広報 80件		A	
	○HPの更新	ホームページについては、展覧会の記者発表と同時に公開されるなど、迅速な公開ができた。アクセス数は昨年度より1割近く向上した。		A	

	<input type="checkbox"/> HPの更新回数、ページ数、アクセス数	<p>博物館HPアクセス実績 全ページ</p> <p>23年度 1,639,886</p> <p>24年度 3,376,130</p> <p>25年度以降 測定不能</p> <p>トップページ</p> <p>24年度 837,815</p> <p>25年度 487,262</p> <p>26年度 715,597</p> <p>27年度 782,556</p>	28年度以降は少しでも早い時期に展示会の出品目録を公開し、周知を図る。	A
	OSNSでの情報発信	公式フェイスブックページでは、27年度に188回のコンテンツ追加を行い、171,065リーチ(記事が表示された回数)だった。ツイッターは、131回のツイートで325,613インプレッション(アクセス数)を得ている。(SNSは26年10月からの実施のため、年度比較はできない)		B
	◎市民ニーズを把握し、必要な改善を行います	特別展のアンケート調査は毎回行われ、直ちに閲覧され、苦情や問題点への対応も総じて迅速に行った。アンケートの集計結果は館内の学芸会議や展示会実行委員会で、職員や共催者間で共有され、より良い展示会運営に反映されている。		B
【目標 計画】 博物館は地域とそこに生活する人々のために存続しなければならない。文化財の保存とそれを利用した諸活動は相互に補完し合わなければならないが、さらにそれらは市民のニーズに応えるものであることが理想であり目指す目標といえよう。市民ニーズの把握のためのツールを持つことと、その分析、さらにはその活用を図らねばならない				
	○定期的な利用者へのアンケート調査 ○非来館者を含めた意識調査	27年度も全ての特別展を対象に投げ入れ方式でアンケート調査を行った。回収率は入館者数の平均1%前後だが、「チューリヒ美術館展」「大英博物館展」では非常に回収率が高かったため、全件の集計まで手が回らなかった。1,000件を超える回収があった場合は、統計サンプル的に充分であり、集計枚数を事前に制限するなど、他の業務を圧迫しない工夫も必要かと思われる。また、アンケート結果の公開については、満足度指数と図録購入率など、入館者がどれだけ展示会を気に入っていたかを示す数値を公開することについて議論を進めたい。		B
	<input type="checkbox"/> アンケート調査に基づくニーズ・満足度の把握	<p>展示会毎のアンケート回収枚数</p> <p>「チューリヒ美術館展」:4,287枚</p> <p>「ボヘミアングラス展」:778枚</p> <p>「大英博物館展」:2,384枚</p> <p>「須磨の歴史と文化展」:277枚</p>	「チューリヒ美術館展」「ボヘミアングラス展」「大英博物館展」「須磨の歴史と文化展」ともNSI方式による満足度の算出、ご意見・ご要望欄のデータ化を毎日実施・閲覧し館員で共有した。ただし、集計は数が多いので、会期終了後1ヶ月以内に終了させることは困難であった。「チューリヒ美術館展」「大英博物館展」は業者委託により集計したが、全枚数の集計は諦めざるを得なかった。	B
	<input type="checkbox"/> HPへの掲載・公開	館内での「公開の是非」の検討が必要。まず、満足度指数と図録購入率の公表について28年度に検討・議論すべきである。		F
	<input type="checkbox"/> アンケート評価への対応と改善	アンケートに記入された内容で、すぐに対応可能なことは実施・修正した。		A
	◎ボランティア活動を通じて、人々が交流できる場を作ります	学習支援交流員の活動は定着しており、入館者や館外での人々との交流にはなくてはならないものとなっている。		A

【目標 計画】 博物館運営のなかで、人々が交流できる場としてボランティアは一つの姿となりつつある。しかし、単に業務の代替を求めるのではなく、独自の運営形態を職員・ボランティア相互で生み出す必要がある。また、活動を円滑に進めるために、ハード・ソフト両面において整備を図る		A
○ボランティア活動の実施	活動参加者は着実に増えている。新たなワークショップを開発するなど、より活発な活動が認められる。	A
□実績(人数、回数、内容)	<p>23年度 のべ502人/活動回数170回  24年度 のべ643人/活動回数126回  25年度 のべ729人/活動回数120回  26年度 のべ953人/活動回数144回  27年度 のべ1,012人/活動回数146回</p> <p>平成20年度に導入して8年目となり、活動回数や活動参加総人数は過去最高となった。学習室を中心とした学習支援活動に加え、アンケートの集計、講座・イベント開催時の補助、案内業務などにも積極的に参加する態勢が整ってきた。  また、交流員相互が活動のスケジュール管理を行い、活動内容毎に集まり、事前準備して自主的にワークショップを開催するなど、活動の体制が整い、新規交流員も定着してきた点も評価できる。</p>	A
○活動内容の充実	交流員は、館内だけでなく、館外での教育普及活動にも積極的に参加しており、博物館の教育普及活動にはなくてはならない存在となっている。今後とも交流員が自主的に活動できるように支援していく必要がある。	A
□活動内容	<p>定例会  夏休みのワークショップ  教材開発  講座・イベントの補助など  交流員自身の企画によるワークショップ</p> <p>定例の会議などにより意思疎通を図っている。学習支援交流員自身が企画・運営するワークショップは年々充実してきている。27年度は、伊能忠敬の紙芝居を作成するなど、教材も充実してきている。また、「ミニ南蛮屏風をつくろう」など新たなワークショップも開発された。今後、入館者に博物館や居留地の魅力を伝えるような、交流員が企画するワークショップ、新たな教材開発が望まれる。</p>	A
すべての人々にやさしい博物館にします	施設・設備については、荷物用エレベーター、映像監視システムの更新などを実施し、消防設備改修や中央監視システムの更新も28年度中に予定されており、順調に進んでいる。今後は、博物館のリニューアルを実施していく中で、より一層、ユニバーサルデザインの観点から必要な施設、設備の改修を進めていく。	B
◎誰でも利用しやすい施設、設備にします。	リニューアル基本計画では、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた計画となっている。設備の更新も計画通り進んだ。今後は、リニューアル計画の基本設計、実施設計と進むが、より一層のユニバーサルデザインへの配慮をしていく必要がある。	B
【目標 計画】 これからの博物館は、高齢者・障害者・外国人等誰でも利用しやすい施設・設備にしていく必要がある。そのためにユニバーサルデザインへの対応に向け、リニューアルを含め、施設・設備の総合的な改修案を立案し、具体化していく必要がある。		
○施設の計画的な補修、改修	リニューアル基本計画策定にあたって、ユニバーサルデザインの視点のあった計画が策定された。また、設備では荷物用エレベーターや映像監視システム、冷却水ポンプが改修・更新された。平成28年度には、消防設備改修や中央監視システムの更新も予定されている。	B
○省エネルギー・省資源への取り組み	ユニバーサルデザインの視点も織り込まれたリニューアル計画が策定されたが、今後、基本設計、実施設計と進む中で、限られた予算ながらユニバーサルデザインの観点をより進めていきたい。	B

	<input type="checkbox"/> 消防・建築設備等の点検、訓練、安全衛生の確保	消防設備等法定点検を行い、修理の必要な部分については修理を行った。しかしながら、設備の老朽化で故障の頻度も高く、抜本的な設備更新の必要が強まっている。	B
	<input type="checkbox"/> 神戸環境マネジメントシステムを生かした環境負荷の低減	コピー 実績:215,805枚(目標値:220,000枚) 美化活動 実績:24回(目標値:24回)	コピー用紙の低減や美化活動など一定の成果があった。 A
	<input type="checkbox"/> ユニバーサルデザインへの対応	ユニバーサルデザインの観点を取り込んだリニューアル基本計画が策定された。今後基本設計・実施設計と進めていきたい。	B
	<input type="checkbox"/> ユニバーサルデザイン取組	ユニバーサルデザインに配慮した計画が策定されている。基本設計・実施設計策定と進めていく中で、できる限りのユニバーサルデザインに配慮していきたい。	B
	◎誰にでも喜ばれるサービスを提供します	大規模展覧会では、多くの方が入館されるが、見学に際してもマナーが良くない方も多く、控えめに注意しても、その注意したことが、スタッフへの苦情としてあとで出ることも多く、反対に注意しなければ、他のお客様から監視が十分できていないとの苦情を受ける。今後もマナー向上のために、注意事項を目に付く場所に掲示するなどお知らせの方法に工夫をしたい。	B
【目標 計画】 これからの博物館は、誰からも喜ばれるサービスを提供し、利用者から高く評価される博物館にしていく必要がある。そのためには、まず、仕事量に見合った職員・スタッフ数の確保、次に、それらの職員の能力を高めるための研修を実施していく必要があるが、まずは、この前提となる予算の確保が急務である。			
	<input type="checkbox"/> 人的サービスの充実	建物の規模や設備の面で、苦情もあったが、特に大きな問題はなかった。	B
	<input type="checkbox"/> 館内の運営協力体制	問題はなかった。委託先とは連携しながら、運営を行った。	B
	<input type="checkbox"/> 職員の研修	必要な研修については、参加できるよう努めた。	B
	<input type="checkbox"/> 利用者サービス	修理用部品が供給停止となり、万一故障してもすぐに修理ができない可能性があった設備の改修・更新を行った。今後も、施設・設備の運営に問題がないよう適宜改修・更新を行いたい。	B
	◎予算の充実に努めます	人用エレベータ、停電時の非常灯蓄電池の改修ができた。施設の安全面からの充実が図れた。	B
【目標 計画】 市の予算は、非常に厳しいものがあり、毎年減少している。そのため、博物館に必要な予算を獲得していく努力をこれまで以上に行うとともに、外部からの支援金・助成金の獲得に向け、積極的に行動していく必要がある。			
	<input type="checkbox"/> 予算の充実	中央監視盤や消防設備の改修工事が予算化された。ただし、リニューアルの基本設計も計上され、基本計画との整合性も考えながら、執行していきたい。	B

		<input type="checkbox"/> 支援金・助成金の獲得	28年度開催の特別展「松方コレクション展」を企画、開催するに当たって、川崎重工業(株)より寄付を受け、充実した活動ができた。	国の補助金や財団からの補助等一定の成果はあった。今後は広い範囲からの恒常的な寄付をいただけるよう検討する必要がある。	B
		<input type="checkbox"/> 活動指標の内部評価と外部評価の実施	28年度以降の評価にあたっては、より簡潔で明快な指標の設定に努め、わかりやすい評価の確立に向けての検討を進める。定期的な業務評価の実施も必要である。		B
		<input type="checkbox"/> 自己点検、評価システム	各自が、業務分担を的確に把握し、業務開始時、遂行時、完了時に常にPDCAサイクルを意識し、業務を遂行することが必要である。28年度以降、より現状に即した、分かりやすい評価項目、評価システムの構築を目指す必要がある。		B